

S3

**多義性、あるいは独立した意味と認められる条件について：
日本手話のメタファー**

富田望
(ギャローデット大学 [アメリカ])

要旨

手話言語の多義語についての先行研究として、たとえば Shimada (例として日本手話の「泣く」と「悲しい」) や Johnston & Schembri (例としてオーストラリア手話の「茶」と「コーヒー」) がある。このような研究では、図1に見られるように、多義語とされる手話単語の音韻論的な形式が似通っている。しかし、先行研究の問題点として、これらの例が多義語として扱えることの根拠について、何ら分析がなされていない点が挙げられる。これは認知言語学の視点からは「多義性の誤謬」と呼ばれる。すなわち、独立した意味と認められるための一貫性のある判断基準が欠けているのである。

伝統的には、多義性は似通った言語形式が複数の意味を持つことと理解され説明されてきた。多義性は、ある程度抽象的な意味から他の意味が派生するという形の、言わば「随伴現象」的なものでもあり得る。しかし、認知言語学の観点から言うと、多義性は、それが知覚的な現象であるが故に、語彙的曖昧さを引き起こす。意味論的には、多義性は同音異義とは異なる。多義性とは、多義性をもたらす独立した意味たちのカテゴリであり、心的レベルでの語彙的組織化の現れである。

本研究は、知覚的メタファーの眼鏡を通して、日本手話に現れる「議論は戦争である」というメタファーを言語学的に分析する。その際、多義性と曖昧性 (vagueness) とを区別する必要がある。そのための鍵となるのは、語彙的図示性を手がかりに得られる語彙的曖昧性 (ambiguity) である。第二に、Evan & Tyler の提唱する一貫性のある多義性・意味論ネットワークの枠組みを用いる。

手話言語の持つ語彙的図示性について、図示的マッピングを分析することにより、発表者は二つの手話単語「戦う」と「議論する」を比較する。手形は両者で共通しているが、「戦う」は二人の戦士が細長い武器を互いにぶつけ合うイメージに基づいているのに対して、「議論する」は二人の論者が意見の不一致にあるイメージに基づいている。手形のみならず両手の空間的位置関係も別個の意味を導くのに貢献している。これが、意味論的記憶に保存されている複数の意味の間で区別があることの第一の証拠である。第二の証拠としては、人差し指が中核的意味として細長い物を表す粗い語根ネットワークが挙げられよう。

富田：多義性、あるいは独立した意味と認められる条件について：日本手話のメタファー

(TEA vs COFFEE in Australian Sign Language) (SAD and CRY in Japanese Sign Language)



TEA, CUP,
CUP-OF-TEA, CAFÉ



SAD and CRY

☒ 1